

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5473 参照



※ P5485 参照



※ P5496 参照

2021.1
No. 754

目次

[巻頭言]

新しい年を迎えて 5471
総長 湊 長博

[大学の動き]

- 理事補が発令される 5473
- 名誉教授称号授与式を挙行 5473
- 第77回京都大学未来フォーラムをオンラインにて公開 5473
- 令和2年度定年退職予定教員 5474

[部局の動き]

- 経済学研究科「京都大学国際連携グローバル経済・地域創造専攻（修士課程）」の開設 5479
- 桂図書館開館記念式典を開催 5480
- 第9回国際シンポジウム「ポスト人新世における生存の未来」を開催 5481
- 「第4回マヒドン大学オンサイトラボラトリーワークショップ」をオンラインで開催 5482
- 「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する京都大学国際シンポジウム」をオンラインにて開催 5483
- マヒドン大学と表敬面談を実施 5484
- フィールド科学教育研究センターが、芦生研究林保全とコロナ禍の学生教育を目的とした KDDI 株式会社との連携を発表 5485

- フィールド科学教育研究センターが、株式会社モンベルと持続可能な社会の発展に寄与することを目的とした連携協定を締結 5486
- 「京大 森里海ラボ by ONLINE」を開催 5487
- 高等研究院 iCeMS 量子ナノ医療研究センターが、シンポジウム「コロナウイルス感染症とナノメディシン」を開催 5488

[寸言]

既成概念 福本 勝司 5490

[随想]

国際交流：国際共同研究と国際教育 5491
名誉教授 竹安 邦夫

[洛書]

スウェーデンの博士論文審査事情 小山 里奈 5492

[榮譽]

- 田村 類 名誉教授が N. M. Emanuel Medal を受賞 5493
- 日本学士院会員に選出
吉野 彰 旭化成株式会社名誉フェロー 5494
金出 武雄 高等研究院招聘特別教授 5495

[話題]

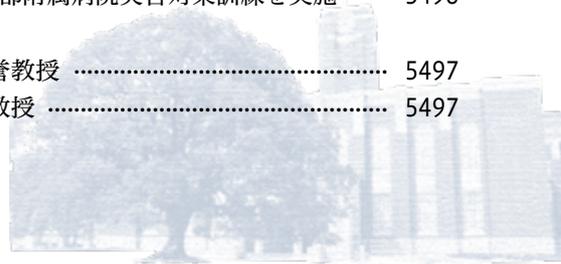
● 令和2年度医学部附属病院災害対策訓練を実施 5496

[訃報]

吉川 和広 名誉教授 5497
櫻井 彰 名誉教授 5497



京都大学



巻頭言

新しい年を迎えて

総長 湊 長博



新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルスに振り回され、当初からさまざまな制約を余儀なくされました。主だった行事はほとんどできなくなり、学生はオンライン講義、新入生も大学に顔を出せない、事務職員はテレワークで勤務することになり、会議もほとんどオンラインでの開催になりました。1年が経過して、これらの運用の要領が分かってきたわけですが、これはあくまで避難措置です。よく考えると、それ以前に当たり前のように行ってきたことの中に、非常に大事なことがあったのだということに改めて気づくことがあると思います。

それは特に、人と人のコミュニケーションに関してです。コミュニケーションは、これまで自動的にエンパシー（共感）を含んでいました。しかし、オンラインでのコミュニケーションでは、マイクとカメラを用いた聴覚と視覚のみのコミュニケーションとなります。単に情報を伝えるのみであればそれで十分ですが、我々はそれだけではなく、五感の全てを用いてさまざまな情報を取り入れ、それを総合してコミュニケーションを取っています。時には第六感ということもある。それがいわゆる「共有する場」というもので、「場の空気を読む」「相手を慮る」などのエンパシーを創り出します。オンラインによるコミュニケーションでは、どうしてもそれができません。

最近、「ポストコロナ時代」という言葉がよく用いられますが、これは少しミスリーディングかもしれないと思います。ポストコロナの新しい時代は、このようなコミュニケーションでいいのではないかと誤解されかねません。これが常態でいいというのはやはり間違いで、基本的に我々は、本来の我々のコミュニケーション機能が最大限発揮できるプレコロナの時代に戻ることに先決で、まさにそのためにこそ今、感染抑止と収束に全力を尽くすべきときです。コロナ感染症はやはり怖いものです。なんとかしてプレコロナの状態に戻ったときに、我々はそれまで普通であったことがどれほど大事であったかということに気がつくのだらうと思います。

さて、その様な状況の中、令和3年は、大学にとってどの様な年になるのでしょうか。政府では、国立大学改革が非常に積極的に進められています。特にこの度の主な対象は研究大学であり、日本の研究大学が世界の主要な研究大学と比べて非常に遅れを取っていることへの危機感が、今の政府にはあります。我が国を代表する研究大学としての京都大学が、これからどの様な動きを見せるか、どの様な成長戦略を提示するか、非常に注目されています。

その意味で、今年は重要な年になります。キーワードは3つあります。1つ目が「大学の自律性」、2つ目は「大学の機能拡張」、3つ目が「多様性の拡大」です。この3つのキーワードを実現するために何が必要か。それにはまず大学のインフラを強くすることです。国立大学の改革を求められたときに、まず行わなければならないのはインフラをきちんと整備強化しておくことです。そのうえで研究大学として、我々が個別の成長戦略を打ち出せるという体制を作っておかなければなりません。

巻頭言

大学のインフラで最も大事なものの1つは、事務組織です。事務組織がどれほど統合された仕事を実施できるかということが、大学の命運を握っているといっても過言ではありません。何かあったときに、「それはできません」「やったことがありません」で済ませられる時代ではなくなっています。今まで「できない」で済ませてきたことも本当はできるかもしれない、つまりリスクを取っていかないと強いインフラはできません。今の状態をそのまま何とか維持していても、それは有事のときには非常に脆いかもしれない。そのために重要なことは、柔軟性と強靱性です。柔軟性とは何か。それはさまざまな部署がどれだけ自由に連携することができるか、それによりどれだけ効率よく動くことができるか、どれだけ新しい仕事へのリスクを取ることができるか、ということです。柔軟かつ強靱な事務組織が、我々研究大学がこれから成長していくために必須のインフラです。

令和3年は、国立大学、とりわけ私たち研究大学にとって、命運に関わる年になるのではないかと思います。我々教職員は一丸となって、まず今は少しでも早くプレコロナの状態に戻ることには全力を尽くし、そのうえで新しい時代の京都大学を作っていくことができればと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(令和3年1月5日(火)、事務本部等に所属する職員を対象として開催した『総長年頭挨拶』より)

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

【任期：令和2年11月16日～令和4年9月30日】
(補佐する理事)

研究規範担当理事	伊 佐 正	基礎・社会医学系 (大学院医学研究科) 教授	(新任)
----------	-------	------------------------	------

[目次に戻る ↗](#)

名誉教授称号授与式を挙

12月10日(木)の午後4時30分から総長応接室において、稲垣恭子 理事・副学長、北村隆行 理事・副学長、時任宣博 理事・副学長、平井明成 理事、平島崇男 理事・副学長、村上 章 理事・副学長、村中孝史 プロボスト 理事・副学長の出席のもと、名誉教授称号授与式が挙行され、令和2年10月1日付けで、湊 長博 総長から山極壽一 前総長に名誉教授の称号が授与されました。



名誉教授称号授与式後の集合写真

(総務部 (人事課))

[目次に戻る ↗](#)

第77回京都大学未来フォーラムをオンラインにて公開

第77回京都大学未来フォーラムは、『夜は短し歩けよ乙女』など京都や本学を舞台にした小説も多く執筆されている作家の森見登美彦氏 (農学研究科 修士課程修了) と藤原辰史 人文科学研究所准教授による対談を、オンラインにて配信しています。

「森見登美彦さんと語る小説の世界 「書く」ということ。「読む」ということ。」をテーマに、藤原准教授の進行のもと、森見氏の大学生時代を振り返るとともに、小説を書く際に心掛けていることなどについて語りました。あらかじめある世界を描写するために文章を書くのではなく、言葉自体によって新たな世界を作り出していくこと、思いつきを大切にしながら作品づくりに取り組んでいることなど、普段は知ることができない森見氏の世界が垣間見えました。

今回、初めての対談形式での未来フォーラムとなりましたが、通常は非公開の清風荘で行っ

大学の
動き

たことについても好評でした。視聴者からは「森見氏の作品の背景が見えたようで面白かった」,
「創作の背景を聞いて、作品を読みたいと思った」などの感想が寄せられました。

【関連リンク】

本対談の配信は、3月26日(金)午後5時00分まで公開しています(お申し込みは3月26日
(金)午後3時00分まで受付可能です。無料で、配信期間中は何度でもご覧いただけます)。

[https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/social/events_news/office/soumu/shogai/
event/2020/201102_1100.html](https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/social/events_news/office/soumu/shogai/event/2020/201102_1100.html)



清風荘で京大生時代について話す森見氏(左)と藤原准教授(右)

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

令和2年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員69名(教授56名、准教授9名、講師1名、助教3名)
が3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	南川高志	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	西洋史, 特にローマ帝国の政治と 社会に関する研究
	ANDERSON, James Russell	行動文化学専攻 行動文化学講座	ヒト以外の霊長類における行動, コミュニケーション, 認知の研究
	松田素二	行動文化学専攻 行動文化学講座	アフリカ社会に関する社会人間学 的研究, 文化動態に関する比較社 会学的・日常人類学的研究
	永原陽子	現代文化学専攻 現代文化学講座	南部アフリカ史の研究, 比較植民地史の研究
教育学研究科	岩井八郎	教育学環専攻 教育社会学講座	近現代日本におけるライフコース の変動に関する計量社会学研究, アジアの家族と家族意識に関する 比較研究
法学研究科	木南敦	法政理論専攻 外国法講座	英米法の研究
	松本芳希	附属法政実務交流セン ター 法科大学院準備部門	刑事裁判実務の観点から刑事訴訟 手続を研究, 刑事実務の動向を踏 まえた法曹養成教育の研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
経済学研究科	久本 憲夫	経済学専攻 比較制度・政策講座	日本とドイツにおける社会政策及び労使関係に関する研究
	藤井 秀樹	経済学専攻 市場会計分析講座	会計の利益計算構造とシステム変化に関する比較制度研究
理学研究科	上 正明	数学・数理解析専攻 相関数理講座	3,4次元多様体のゲージ理論由来の不変量等によるトポロジーの研究
	梅田 亨	数学・数理解析専攻 表現論代数構造論講座	不変式論的視点による双対性, 特に Capelli 恒等式を中心とした双対性の具体的記述の研究
	山口 孝男	数学・数理解析専攻 多様体論講座	リーマン多様体の収束・崩壊現象に関する研究
	篠本 滋	物理学・宇宙物理学専攻 非線形物理学講座	非線形形力学, 統計物理学, 計算論的神経科学, データサイエンス
	川合 光	物理学・宇宙物理学専攻 物質・時空基礎論講座	素粒子論・場の理論・弦理論に関する研究
	畑 浩之	物理学・宇宙物理学専攻 物質・時空基礎論講座	素粒子論, 特に場の理論および弦理論の研究
	村上 哲也	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	強い相互作用が支配的なハドロン多体系の示す熱力学的性質の加速器を使った実験的研究
	秋友 和典	地球惑星科学専攻 水圏地球物理学講座	海洋および湖沼における物理現象の力学メカニズムに関する研究
	沼田 英治	生物科学専攻 自然史学講座	昆虫の季節適応および時間設定機構の研究
	平野 丈夫	生物科学専攻 機能統合学講座	シナプス可塑性に関する分子細胞生物学的研究および小脳による運動学習機構に関する研究
医学研究科	武田 俊一	医学専攻 遺伝医学講座	がん化の原因となる DNA 損傷の修復に関わる遺伝子の機能を, DNA 修復因子の働きから解析する研究
	里村 一成	社会健康医学系専攻 国際保健学講座	タバコ対策に関する研究, 後期高齢者の保健事業に関する研究, CODEX に関する研究, KDB に関する研究
	大塚 研一	人間健康科学系専攻 情報理工医療学講座	偏微分作用素の基本解の正值性, 固有値の漸近分布に関する研究
医学部附属病院	伊藤 克彦	医療安全管理部	造血, 精子形成の研究, 低温・熱ショックで誘導される分子の研究, レトロウイルス・ベクター骨格の再検討
工学研究科	細田 尚	都市社会工学専攻 河川流域マネジメント工学講座	開水路水理学の高度化と応用, 河床河道変動の力学, 湖沼環境の流体力学的研究, 乱流モデルの水工学での応用
	富田 直秀	機械理工学専攻 バイオエンジニアリング講座	工学, 医学, 哲学, アートを含む多分野の知識・経験を融合して, 生活の「質」の向上に役立てる研究
	吉田 英生	航空宇宙工学専攻 航空宇宙システム工学講座	熱工学に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	瀧 川 敏 算	材料化学専攻 高分子材料化学講座	高分子レオロジーに関する研究
	藤 田 静 雄	附属光・電子理工学教育 研究センター	先進電子材料の機能創成および新規デバイス応用の研究, 機能材料の成膜プロセスの研究
	田 中 宏 明	附属流域圏総合環境質研 究センター	都市の水環境および排水の汚染物質の評価, 制御, 利用に関する研究
農 学 研 究 科	富 永 達	農学専攻 耕地生態科学講座	雑草の除草剤抵抗性の進化と生活史特性に関する研究
	松 村 康 生	農学専攻 品質科学講座	分散系食品の品質制御に関する研究, 乳化物等の様々なタイプの分散系食品の品質の評価と制御
	植 田 充 美	応用生命科学専攻 応用生化学講座	生命情報を基に網羅的解析手法による高次元生命現象の分子レベル解析と生物機能を拡大した細胞育種の研究
	中 川 好 秋	応用生命科学専攻 応用生化学講座	昆虫生育制御剤の構造活性相関, 分子設計および作用機構に関する研究
	宮 下 直 彦	応用生物科学専攻 資源植物科学講座	植物を対象とした分子集団遺伝学的研究, 及び土壌微生物を対象とした群集生態学的研究
人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	田 邊 玲 子	共生人間学専攻 人間社会論講座	18世紀ドイツ文学の研究, 女性学・ジェンダー論
	江 田 憲 治	共生文明学専攻 現代文明論講座	近現代中国政治思想史・中国共産党史・中国労働運動史
	大 川 勇	共生文明学専攻 現代文明論講座	中欧精神史におけるユートピア的思惟の研究
	増 井 正 哉	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	南アジア及び日本における都市・集落の形成史と歴史遺産の保存・活用に関する研究
	鎌 田 浩 毅	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	日本列島の「大地変動の時代」における火山と地震のメカニズム解明から激甚災害を予測・軽減する研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	手 塚 哲 央	エネルギー社会・環境科学専攻 エネルギー社会環境学講座	エネルギーシステム学の研究
	石 山 拓 二	エネルギー変換科学専攻 エネルギー変換システム学講座	レシプロ内燃機関の熱効率向上, 排気エミッションの低減, ならびに代替燃料の活用に関する研究
	宅 田 裕 彦	エネルギー応用科学専攻 資源エネルギー学講座	省エネルギーを目的とした金属の塑性加工プロセスの最適化に関する研究
情 報 学 研 究 科	守 屋 和 幸	社会情報学専攻 生物圏情報学講座	動物遺伝育種学ならびに生物圏情報の取得と利用に関する研究
	中 村 佳 正	数理工学専攻 応用数学講座	可積分系とその計算数学への応用
	小 野 寺 秀 俊	通信情報システム専攻 集積システム工学講座	集積回路の設計技術に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
地球環境学堂	SINGER, Jane	地球益学廊	開発や気候変動による強制移住や再定住の研究
	藤井 滋穂	地球親和技術学廊	途上国の水環境衛生に関わる研究, 水環境における水・汚濁物の挙動解析, 微量化学汚染物質の挙動・管理研究
経営管理研究部	末松 千尋	経営管理講座	トランザクション・コストを援用したIT, 事業創再生, イノベーションに関する研究
	徳賀 芳弘	経営管理講座	国際会計, 財務会計に関する研究
化学研究所	川端 猛夫	物質創製化学研究系	有機合成に関する研究: 不斉誘導原理の創出・位置選択的官能基化および遠隔位不斉誘導に有効な触媒の開発
人文科学研究所	浅原 達郎	文化表象研究部門	先秦時代の金文の研究
	岩井 茂樹	文化構成研究部門	14世紀-20世紀中国の財政史研究, 中国近世の法制と裁判文書研究, 東アジアの朝貢と互市の研究
ウイルス・再生医科学研究所	柳川 伸一	ウイルス感染研究部門	動物の形態形成や細胞の癌化に働く, Wnt蛋白質の細胞内シグナル伝達機構に関する研究
	角 昭一郎	再生組織構築研究部門	代謝・内分泌疾患に対する再生医療の研究, 特にバイオ人工膵島, 細胞の集塊化, 細胞融合の研究
防災研究所	松浦 純生	地盤災害研究部門	斜面変動の発生機構と防止対策技術に関する研究
	石川 裕彦	気象・水象災害研究部門	気象災害の研究, 大気陸面相互作用の観測的研究, 物質の移流拡散に関する研究
	中川 一	附属流域災害研究センター	水および土砂災害の防止・軽減に関する研究
経済研究所	溝端 佐登史	経済制度研究部門	比較経済学, ロシア・東欧・EU経済論, 制度経済学, 国際経済学
複合原子力科学研究所	大久保 嘉高	粒子線基礎物性研究部門	パイ中間子による核反応の研究, 放射性原子核をプローブとした物質科学の研究など
	川端 祐司	粒子線基礎物性研究部門	低エネルギー中性子による中性子制御素子開発及び中性子イメージングに関する研究
	増永 慎一郎	放射線生命科学研究部門	中性子捕捉療法を含む癌治療の高度化の為に休止期腫瘍細胞特性, 腫瘍不均一性, 癌幹細胞性の相互関連性解析
霊長類研究所	濱田 穰	進化系統研究部門	霊長類の身体形態の成長・老化過程, および小進化過程に関する研究
東南アジア地域研究研究所	DE JONG, Wilhelmus Adrianus	グローバル生存基盤研究部門	Forest governance, SDGs, climate, and restoration
学術情報メディアセンター	壇辻 正剛	教育支援システム研究部門	音声学及び応用言語学的研究, 言語文化論的研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
野生動物 研究センター	幸 島 司 郎	健康長寿科学研究部門	様々な野生動物の生態と行動，および氷河生態系を中心とする雪氷生物に関する研究
フィールド科学教育 研究センター	嵯 元 道 徳	森林生態系部門	森林の持続的な利用と再生を実現する合自然的な技法の開発へ向けた森林植生・生態学，及び造林学的研究
	吉 岡 崇 仁	森林生態系部門	森林集水域における栄養物質や溶存有機物の動態，環境の価値と環境意識に関する研究
	大 和 茂 之	海洋生態系部門	海産ヨコエビ類とフジツボ類の分類学的研究，田辺湾生物相の変動に関する研究，南方熊楠に関する研究
環境安全保健機構	酒 井 伸 一	環境管理部門	循環型社会形成と廃棄物管理に関する研究

(総務部(人事課))

[目次に戻る ↗](#)



経済学研究科「京都大学国際連携グローバル経済・地域創造専攻（修士課程）」の開設

経済学研究科では、10月22日付けで文部科学省より設置認可を受け、英国・グラスゴー大学（社会科学・政治学スクール）、スペイン・バルセロナ大学（経済学・経営学大学院/学部）および京都大学（経済学研究科）の3大学による共同学位（ジョイント・ディグリー）プログラム「京都大学国際連携グローバル経済・地域創造専攻（修士課程）」を2021年9月に開設します。

本専攻は、2年間の課程のうち第1学期（6ヶ月）をグラスゴー大学、第2学期（6ヶ月）をバルセロナ大学に滞在して学修し、第3・4学期（12ヶ月）を本学で学ぶ、全課程を通じて英語を教育言語とする実務家養成型・秋入学の国際プログラムです。

本専攻のカリキュラムは、本学を含む世界7カ国・7大学による国際的大学連合（コンソーシアム）による修士共同学位プログラム（Erasmus Mundus International Master Degree Program in Global Markets, Local Creativities：略称GLOCAL）に組み込まれた一つのコース（スタディ・トラック）をなし、その多国籍的な教育資源を活用することにより国際的人材を育成します。

以上のことについて、11月17日（火）に記者会見を行いました。

【関連リンク】

- ・ 経済学研究科
<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/>
- ・ 京都大学国際連携グローバル経済・地域創造専攻
<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/glocal/>
- ・ GLOCAL
<http://globallocal-erasmusmundus.eu/>



記者会見の様子 左から、江上雅彦 経済学研究科長，黒澤隆文 経済学研究科教授

（大学院経済学研究科）

[目次に戻る ↗](#)



桂図書館開館記念式典を開催

4月に桂キャンパスにエリア連携図書館として開館した、桂図書館の開館記念式典を12月16日(水)に開催しました。

記念式典は、笠原 隆 文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部技術参事官、三宅隆悟 同研究振興局参事官(情報担当) 付学術基盤整備室長、門川大作 京都市長、稲垣勝彦 京都府文化スポーツ部長、山極壽一 前総長、湊 長博 総長、引原隆士 図書館機構長、大嶋正裕 工学研究科長、岸田 潔 桂図書館長によるテープカットで始まりました。

続いて、湊総長の挨拶、来賓の祝辞の後、桂図書館の紹介を行い、和やかな雰囲気の中、参加者は新しい館内を見学しました。



テープカットの様子



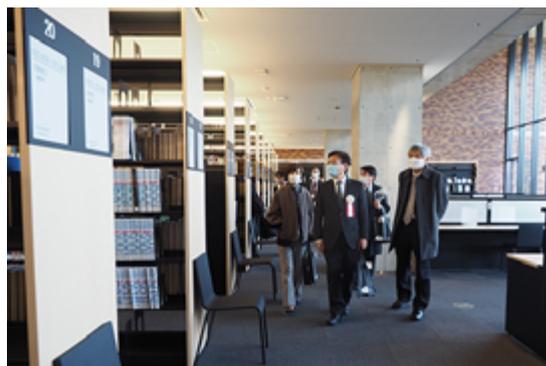
挨拶を行う湊総長

笠原技術参事官による祝辞

開設の経緯等を説明する引原機構長

建設設計の経緯等を説明する岸 和郎

図書館説明をする大嶋研究科長 誉教授



施設見学の様子 (閲覧室)



施設見学の様子 (ラウンジ)



桂図書館は、理工系分野の専門図書館機能に加え、オープンラボ、リサーチコモンズなど新しい教育・研究のあり方の探索や映像の作成ができる部屋を有し、図書館の新時代の機能を作り出す場として整備されました。

なお、記念式典は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、マスクの着用の徹底、ソーシャルディスタンスへの配慮のもと、行いました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

第9回国際シンポジウム「ポスト人新世における生存の未来」を開催

総合生存学館(思修館)は、『WIRED』日本版、株式会社フェニクシー、リスタートアップラボ合同会社との共催により、第9回国際シンポジウム「ポスト人新世における生存の未来」を11月17日(火)にオンラインで開催しました。



賣学館長の挨拶



第1部、第2部のモデレータ: 篠原雅武特定准教授

第1部は、賣馨総合生存学館長の開会挨拶で始まり、ベンジャミン・ブラットン カリフォルニア大学サンディエゴ校教授による基調講演「On the Post-Anthropocene」を行いました。

第2部のパネルディスカッションでは、法学者の稲谷龍彦氏、芸術家の長谷川愛氏、デ



ベンジャミン・ブラットン教授



基調講演

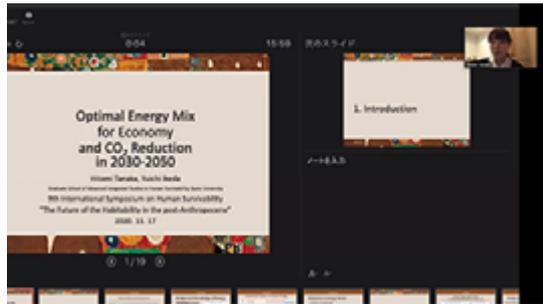


総合生存学館学生による研究発表(チアゴさん)



同(何さん)

部局の
動き



総合生存学館学生による研究発表(田中さん)



同(前田さん)



第3部のモデレータ：高島宏明特定教授

ザイナーの川崎和也氏、Placy主宰の鈴木綜真氏らが、「人新世の時代、コロナ禍によって世界はどう変わるか?」をテーマに活発な議論を交わし、出口康夫 文学研究科教授による挨拶で第1部・第2部は閉会しました。

続いて、第3部の総合生存学館の学生による研究発表では、2年生のチアゴ・シュバさん、何 家歓さん、田中仁海さんおよび5年生の前田里菜さんの4名が研究発表を行い、池田裕一 総合生存学館教授、山敷庸亮 同教授、積山 薫 同教授の3名による総括コメントがありました。

最後に、實学館長による全体の閉会挨拶があり、盛況のうちに終了しました。

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る](#)

「第4回マヒドン大学オンサイトラボラトリーワークショップ」をオンラインで開催

地球環境学堂では、京都大学 On-site Laboratory「Mahidol環境学教育・研究拠点」の活動として、「第4回マヒドン大学オンサイトラボラトリーワークショップ」をオンラインで11月27日(金)に開催しました。本学から39名、マヒドン大学から38名が参加し、そのほかに日本、タイ、中国、ミャンマーの7大学と1組織から11名が加わり、合計で88名が参加しました。

はじめに、本事業のリーダーである藤井滋穂 地球環境学堂教授により、On-site Laboratoryやワークショップについての説明と講演者の紹介がありました。続いて「環境工学」、「農学・食料・生態系」、「公衆衛生」、「化学工学」の4つの分科会に分かれ、それぞれの分野での研究紹介、共同研究・教育の推進のための討議が行われました。

The 4th Workshop on
Kyoto University - Mahidol University On-site Laboratory
Date: November 27, 2020 **On-line**

Registration:
<https://docs.google.com/forms/d/1FAIpQL58daEKtGvaCnHQFX2zUP83Jp7MCdb27hQtoDg8WRNg/viewform?usp=sharing>

Overall Schedule

Japan	Thai	Part I (Parallel sessions)
10:50 - 11:00	08:50 - 09:00	Opening Greetings, and Introduction of participants
11:00 - 12:30	09:00 - 10:30	Room1: Parallel session 1 «Environmental Engineering» Chaired by Dr. Itakura (MU) and Dr. Nohama (KU)
11:00 - 12:30	09:00 - 10:30	Room2: Parallel session 2 «Agriculture, Food, and Ecosystem» Chaired by Dr. Watschana (MU) and Prof. Kanazaki (KU)
11:00 - 12:30	09:00 - 10:30	Room3: Parallel session 3 «Public Health» Chaired by Dr. Arthit (MU) and Dr. Harada (KU)
11:00 - 12:30	09:00 - 10:30	Room4: Parallel session 4 «Chemical Engineering» Chaired by Dr. Sira (MU) and Prof. Sano (KU)
12:30 - 14:30	10:30 - 12:30	Break (report making by coordinators)
		Part II (Plenary sessions)
14:30 - 14:35	12:30 - 12:35	Session remarks
14:35 - 14:55	12:35 - 12:55	Report from Environmental Engineering
14:55 - 15:15	12:55 - 13:15	Report from Agriculture, Food, and Ecosystem
15:15 - 15:35	13:15 - 13:35	Report from Public Health
15:35 - 15:55	13:35 - 13:55	Report from Chemical Engineering
15:55 - 16:20	13:55 - 14:20	Plenary discussion
16:20 - 16:30	14:20 - 14:30	Closing

第4回ワークショップのチラシ



分科会後、休憩を兼ねた取りまとめ時間を経て、総括セッションを実施しました。まず、各分科会の内容が報告され、次にダブルディグリーほか種々の教育・研究事業での進捗が示されました。続いて総合討論が行われ、このような機会を増やすことが協働教育・研究を推進のために重要であることを確認しました。最後に、Suwanna Kitpati Boontanon マヒドン大学准教授による閉会の挨拶でワークショップは終了しました。

本事業は、2018年度に採択された5つのOn-site Laboratory事業の一つです。当初は、地球環境学堂が単独で実施していましたが、2020年度から農学研究科、工学研究科、医学研究科も加わり、今後の展開が期待されています。

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)

「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する京都大学国際シンポジウム」をオンラインにて開催

本学とマヒドン大学の共同主催で「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する京都大学国際シンポジウム」を11月30日(月)と12月1日(火)の2日間に渡ってオンラインにて開催しました。本シンポジウムは、「海外サテライト形成によるASEAN横断型環境・社会イノベーター創出事業」の支援のもと実施され、本学とマヒドン大学のほか、アジア・アフリカ・欧米18ヵ国73組織(60大学、13企業)から研究者や学生、日本の環境関連企業などから1日目は277名が参加し、2日目は166名が参集しました。

1日目は、Banchong Mahaisavariya マヒドン大学長、湊 長博 総長による開催の挨拶から始まり、Prasit Watanapa マヒドン大学教授、喜多 一 国際高等教育院教授がコロナ禍における大学教育機関の対応をテーマに基調講演を行いました。その後、若手研究者と学生



湊総長の開会挨拶



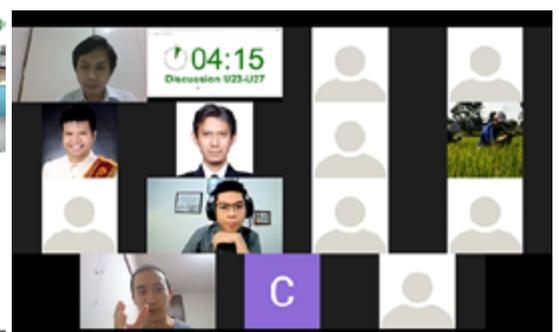
Mahaisavariya 学長の挨拶



シンポジウムのWebサイト



若手研究者プレゼンテーションの様子



ポスター発表者の質疑応答の様子



によるポスター発表への質疑応答セッションとして、理工学・農学/生物学・都市農村計画・政策経済の4つの分野に分かれて討論を行いました。また、「大学におけるポストコロナ対策の情報共有」として、アジア・欧米7カ国7大学におけるポストコロナの状況や取り組みなどの紹介があり、活発な議論が交わされました。まとめのセッションでは、藤井滋穂 地球環境学堂教授がこれまでのシンポジウムの経緯を説明し、Nguyen Thi Anh Tuyet ハノイ理工科大学教授、清水芳久 工学研究科教授、Ernan Rustiadi IPB大学教授から今後の国際連携についての提案が行われ、1日目が終了しました。

2日目は前日に引き続き、4つの分野（理工学・農学/生物学・都市農村計画・政策経済）に分かれて若手研究者による環境研究の発表を行いました。その後、全体セッションとして5つの国際共同研究に関するプロジェクトの紹介があり、今後の国際連携のあり方について議論が交わされました。閉会式では、若手研究発表セッションの分野ごとの発表内容の共有を行い、4つの分野のポスターについて Tran Van Quang ダナン大学教授、Ngo Bunthan 王立農業大学長、Tran Thanh Duc フェ農林大学教授、内藤大輔 農学研究科助教からコメントがあり、ポスター賞の表彰式を勝見 武 地球環境学堂長により行いました。最後に、舟川晋也 地球環境学堂教授と Nopraenue Sajjarax Dhirathiti マヒドン大学副学長の閉会の挨拶でシンポジウムは終了しました。

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)

マヒドン大学と表敬面談を実施

本学とマヒドン大学(タイ)の共催で11月30日(月)と12月1日(火)に「アジアにおける地球環境学教育・研究に関する京都大学国際シンポジウム」を開催する機会を利用し、11月30日(月)の開会前に、湊 長博 総長、平島崇男 理事・副学長、勝見 武 地球環境学堂長、澤山茂樹 農学研究科長、大嶋正裕 工学研究科長、重田真義 アジア・アフリカ地域研究研究科長ら10名は、オンラインにてマヒドン大学との表敬面談を行いました。マヒドン大学側は、Banchong Mahaisavariya 学長、Nopraenue Sajjarax Dhirathiti 副学長、Jackrit Suthakorn 工学部長、Nawatch Surinkul 工学部土木環境工学科長、Suwanna Kitpati Boontanon 工学部修士プログラム長ら11名が参加しました。

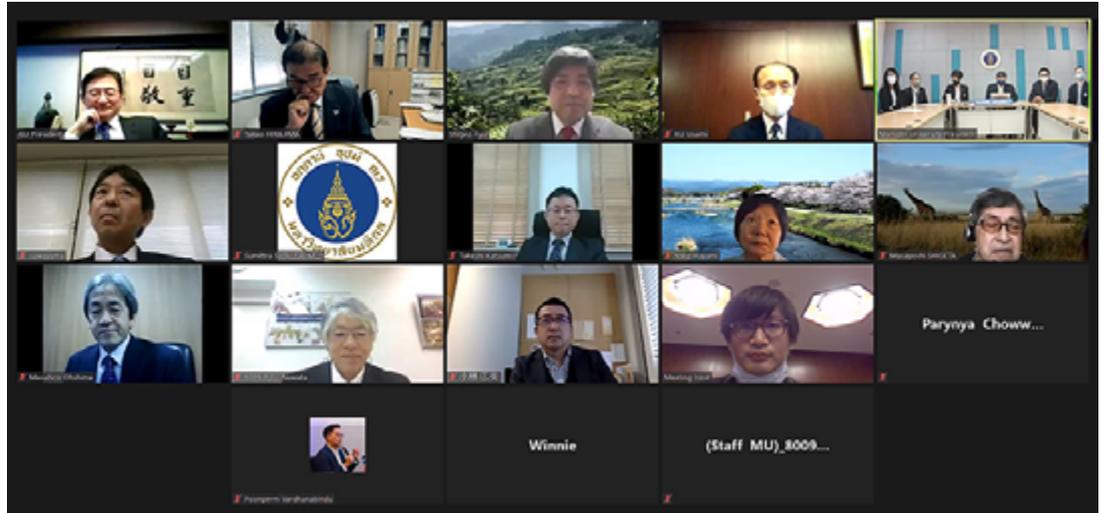
面談は、はじめに Dhirathiti 副学長よりマヒドン大学側の参加者紹介があり、次に Mahaisavariya 学長から、マヒドン大学の説明や今年度の国際シンポジウムのオンライン開催に携わる双方のスタッフへの感謝の言葉を含む挨拶がありました。続いて、マヒドン大学 On-site Laboratory 事業リーダーの藤井滋穂 地球環境学堂教授より本学側のメンバーの紹介があり、湊総長から、コロナ禍が大学の研究・教育活動に及ぼす影響を含めた本学の現況の紹介を含めた挨拶がありました。その後、自由討論となり、本学およびマヒドン大学の将来の連携について意見交換が行われました。

地球環境学堂は、2016年からマヒドン大学に拠点(Kyoto University Partnership Office)を設置以来、研究および教育においてさまざまな協働を行ってきました。現在は、Cross Appointment Systemによる教員交換、遠隔講義システムによる共同授業、ダブルディグリープログラムや特別聴講生プログラムによる学生の派遣・招へい、Seeds Fundによる若手研究者への支援活動などを展開しています。また、2018年から本学のOn-site Laboratory

部局の
動き

事業に採択され、マヒドン大学工学部に現地運営型拠点を設置し、研究・教育活動をさらに加速させている状況です。

今回の表敬面談では、これらの研究・教育の活動について熱心な討議が行われ、最後は、参加者の写真撮影で終了しました。



Zoom による表敬面談

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

フィールド科学教育研究センターが、芦生研究林保全とコロナ禍の学生教育を目的としたKDDI株式会社との連携を発表

森里海連環学の教育研究に取り組むフィールド科学教育研究センターは、KDDI株式会社と芦生研究林の保全とVR（仮想現実）を活用した教育について連携することを発表しました。10月22日（木）に行った発表会では、KDDI株式会社より芦生研究林基金への寄附目録を、フィールド科学教育研究センターより同社への感謝状を贈呈しました。また、芦生研究林の概要説明およびVR教育コンテンツの体験会を開催しました。



左から、宇佐見典正 関西総支社長と徳地直子 センター長

新型コロナウイルス感染症の拡大のため、本学ではフィールド実習の実施が困難となっています。こうした事態を受け、KDDI株式会社の「ガイド VR-12K-」を活用して森林フィールド実習の疑似体験を可能とする教育コンテンツ作製に関して、両者は連携を進めることになりました。また、新型コロナウイルス感染症収束後も、デジタル世代である学生に対する効果的な教育プログラムに活用します。例えば、当該VRを用いて、森の見方を学んだ後、現地でのフィールド実習を実施することで、フィールドでの学習効果の向上が期待できます。さらに、季節の移り変わりなど、1回の実習では体験することのできない森の様子をVRで疑似体験することで、多様な自然の見方を習得することができます。

部局の
動き



KDDI「ガイド VR-12K-」による森林フィールド実習の疑似体験

KDDI株式会社社員有志によるボランティア活動を行う計画にしており、引き続き、KDDI株式会社と連携し、芦生研究林の保全に取り組んでいきます。

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

フィールド科学教育研究センターが、株式会社モンベルと持続可能な社会の発展に寄与することを目的とした連携協定を締結

フィールド科学教育研究センターは、株式会社モンベルと包括連携協定を締結しました。本協定は、人材育成、社会貢献、自然と生態系の保全などの分野で、相互に連携協力し、持続可能な社会の発展に寄与することを目的としています。

連携・協力事項は、(1) 自然体験の促進による環境保全意識の醸成に関する事、(2) 子どもたちの生き抜いていく力の育成に関する事、(3) 自然体験の促進による健康増進に関する事、(4) 防災意識と災害対応力の向上に関する事、(5) 地域の魅力発信とエコツーリズムの促進による地域経済の活性化に関する事、(6) 農林水産業の活性化に関する事、(7) 高齢者、障がい者等の自然体験参加の促進に関する事、の7項目です。

11月12日(木)に本学で開催した締結式では、徳地直子 フィールド科学教育研究センター長と辰野 勇 株式会社モンベル代表取締役会長が、本連携に対する期待などを含めた挨拶を行い、連携協定書に署名しました。

記者との質疑応答では、一般登山者が現



協定書への署名の様子



左から、協定書を持つ辰野会長と徳地センター長



地のサンプルを収集することで調査研究に参加する「山の健康診断」のアイデアなどが語られました。

今後は双方のイベントなどを通して幅広い取り組みを行い、相互協力を図っていきます。

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

「京大 森里海ラボ by ONLINE」を開催

学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育研究ユニットは、「京大 森里海ラボ by ONLINE」を10月31日(土)に開催しました。「みんながちょっと幸せになれる持続可能な未来をつくるために」というテーマで実施し、全国から11校の高等学校が参加しました。

同ユニットでは、森里海連環学を将来的に担う次世代育成を目標の一つとし、高等学校の課題研究等の支援を積極的に行っています。本イベントは当初、8月に全国の連携高校の高校生を本学に招待しワークショップを行う予定でしたが、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、時期をずらしたうえでオンライン開催に変更しました。

本イベントでは、当日のグループワークでの意見交換をスムーズに進めるために、事前に参加高校生を6グループに分け、そこにファシリテーターである研究者と学生ティーチング・アシスタントが1名ずつ加わり、オンライン上で「残したい風景」をテーマに意見交換を行いました。

当日は、Zoomにより参加した高校生および高校教員と本ユニットとをつなぎ、基調講演、各高等学校紹介、グループワークを行いました。グループワークでは、①多様性を知る、②人と自然を結いなおす、③地域資源をいかす、④地域心理学、⑤ひとをつなぐ、⑥わくわくの伝播の6つのテーマに沿って意見交換を行いました。最後に、検討結果についてすべての参加者を対象に報告し、質疑応答を行いました。

その報告の中で、高校生たちは口々に楽しかったと述べ、また、同じ年代の地域的に離れた高校生が自分たちと同じように環境問題に関心を持ち、研究活動を行っていることに大変刺激をもらったとの感想が寄せられました。

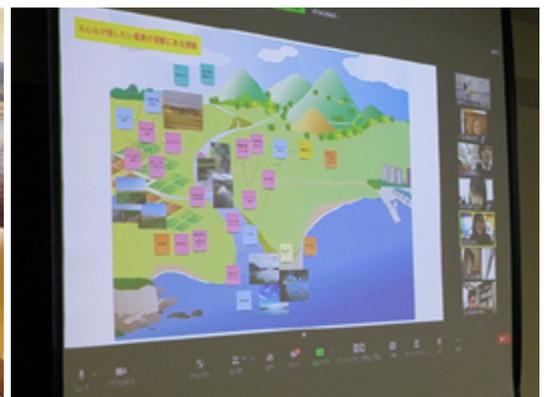
最後に、Zoom画面に映しだされた高校生たちとユニットのスタッフとの記念写真撮



基調講演



グループワークでの意見交換



グループワークの発表の様子



影があり、本イベントは終了しました。

なお、このワークショップの内容については、グラフィックレコーディングにて記録し、今後の活動に活用することとしています。



Zoom 画面の高校生と記念写真



グラフィックレコーディング描写の様子

(森里海連環学教育研究ユニット)

[目次に戻る ↗](#)

高等研究院 iCeMS 量子ナノ医療研究センターが、シンポジウム「コロナウイルス感染症とナノメディシン」を開催

高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS = アイセムス) は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) と本学の On-site Laboratory「量子ナノ医療研究センター」のオンラインシンポジウム「コロナウイルス感染症とナノメディシン」を12月5日(土)に開催しました。

湊 長博 総長より冒頭に挨拶があり、「新型コロナウイルス感染症に立ち向かうにはあらゆる分野の叡知を結集する必要がある。このシンポジウムがさまざまな研究者が集まり議論・協力する場になることを期待している」との言葉がありました。また、本学が新しい融合領域の開拓や、国際共同研究を実体的に進めるための On-site Laboratory (現地運営型研究室) を重点的に推進しており、玉野井冬彦 高等研究院 iCeMS 特定教授・UCLA 教授が立ち上げた UCLA との連携による量子ナノ医療研究センターが、ナノテクノロジー、量子科学、そして医療への応用とさまざまな分野の研究の融合を目指すことで、社会貢献に向けて大きな役割を担っていると紹介しました。

基調講演は、小柳義夫 ウイルス・再生医科学研究所長が「新型コロナウイルス感染症について」



湊総長のオープニングスピーチ



小柳所長の基調講演



玉野井特定教授・量子ナノ医療研究センター長



て」をテーマとして行い、続くセッションでは東京大学、東北大学、物質・材料研究機構、理化学研究所、産業技術総合研究所ほか、学内外からの10名が講演を行いました。コロナ問題へナノテクノロジーの観点からどのようにアプローチしていくのかといった提言、議論が行われ、180名を超える参加がありました。

次のステップとして、新型コロナウイルス感染症の影響が大きい米国で研究と対策をリードしているUCLAとのオンライン会議を計画しています。

【関連リンク】

- ・ 量子ナノ医療研究センター /Quantum Nano Medicine Research Center
<https://www.qnmc.icems.kyoto-u.ac.jp/>
- ・ 高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)
<https://www.icems.kyoto-u.ac.jp/ja/>
- ・ On-site Laboratoryを新たに6件認定しました。(量子ナノ医療研究センター) (2019年7月23日)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2019-07-23-1>

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

既成概念

福本 勝司



大学を卒業して建設会社に入り43年間、国内外、現場、常設部門をバランス良く経験して4年前から子会社の道路会社の社長をしている。

この原稿が掲載される頃でも、まだ新型コロナの感染拡大は収まっていないと思う。

1年前と比べると世の中が一変した。人の対話、移動が制限されることの深刻さは実際に起こるまでは予測ができなかった。飲食店、観光、航空・鉄道などは特に大きな打撃を受けている。影響が比較的少ない道路会社でも仕事のやり方が大きく変わった。会議はWEBが主体になり、日常の現場管理もIT化が進んでいる。2年前から働き方改革のためにIT化を進めていたが、対面でないとコミュニケーションが上手く取れないなど、できない理由が先に立ちIT化が進まなかった。ところが、人の移動が制限され、対面で仕事をするのが難しくなると、WEB会議も現場のIT化も急速に進んだ。逆に情報伝達が中心の会議ではWEBの方が効率的であることに皆が気付いた。もちろん、現状ではWEBで効率的に行われないこともある。しかし、「対面でなければできない」という既成概念が破られた。

「既成概念を破って!」、「既成概念にとらわれず!」という言葉をよく聞くが、何が既成概念か分からないことが多いのではないかと。新型コロナの感染のように外部からの強い圧力があると既成概念は打ち破られる。自分の経験を振り返ると、何を既成概念と理解するかは人により異なると思う。外部から新しい刺激を受けた時に、過去の経験、知識から頭ごなしに否定しないで、白紙から考えることが出来れば既成概念を打ち破ることが出来るのではないだろうか。また、発明が出来る人と出来ない人に分かれるのは、発明家は新しい刺激を受けなくても、自分の頭の中で刺激を作り出し、白紙から考えて既成概念を打ち破ることが出来る人であろう。

何を既成概念としてとらえるかはその人の経験、あるいは読書などでの擬似体験によると思うので、自分のポケットの深さにより既成概念の気付きが異なる。29才から45才まで米国で生活して、日本に戻ってきた時、「福本は変わっている」と言われた。それから、国内で10年間仕事をした後、再び10年間海外の工事を担当した。確かに普通の人と考え方が違うことがあると思う。異文化、価値観の違う人との交流、訴訟を通じてコンサルタント、会計事務所、弁護士との付き合い等、海外の生活の中で色々な経験をしたことによると思う。また、日本に戻ってから、業務の中で50件以上の特許を出したが、これも海外での経験と「なぜ?」と問いかける習慣に依るところが多いと思う。

積極的にいろんな経験することが人間を育てる。米国に留学したことが私の人生が変わるきっかけとなった。特に若い人には環境の異なる海外にも目を向けてほしい。そして、常に「なぜ?」という問いかけを忘れずに新しい発見をしてほしいと思う。

(ふくもと かつじ、大林道路株式会社代表取締役社長、昭和49年工学部卒)

[目次に戻る ↗](#)

随想

国際交流:国際共同研究と国際教育

名誉教授 竹安 邦夫



私は、15年間のアメリカ合衆国での研究・教育生活の後、1995年に京都大学総合人間学部に赴任し1999年に生命科学研究所に配置替え、1996年から京都大学の国際交流委員会(後に国際交流機構)のメンバーを退職まで務め、国際交流に関する様々な案件に関わることが出来ました。外国の大学とのMOUの締結、京都大学のシニアスタッフとしての環太平洋大学協会(APRU)の活動、海外の提携校への視察・行事参加等に携われたことは、この上ない喜びであり、その経験は私の宝でもあります。これらの経験をもとに、2013年から2年間、日本学術振興会(JSPS)のロンドンセンター長として、地元の大学を約50校訪問し、JSPSのプログラム紹介を通してイギリスと日本との間の研究者交流・共同研究の推進に努めました。このロンドンでの経験から「国際交流は50:50(対等で、相互に恩恵を得る姿勢)でやるべきだ」という思いを強固にしました。

研究面では、赴任以来、京都大学の優秀な大学院生に恵まれ、ドイツ・イギリス・スペイン・インド・アメリカ合衆国・台湾等の大学との共同研究・研究者交流を50:50で実践してきました。このことは、若手研究者、特に大学院生の養成に効果があったように思います。共同研究として多くの博士課程の大学院生を海外から受け入れ、彼らのPh.D.取得に貢献しました。また、私の多くの博士課程の大学院生を、Max-Planck研究所、ケンブリッジ大学、マドリッド自由大学、欧州分子生物学研究所(EMBL)、カリフォルニア大学バークレー校など、それぞれの国を代表する大学に派遣し共同研究を推進できたことは、Ph.D.取得後の彼らの研究者としての将来を大いに拡大したことでしょう。もちろん、多くの原著論文を共同で発表できたことも、私にとってこの上ない幸せでした。

私の研究は、原子間力顕微鏡という物理学的手法を生物試料に応用して、生命現象を解明する「ナノバイオロジー」という分野に属します。京都大学に赴任した当時、ナノバイオロジーという概念・分野はありませんでした。今日では、25年前とは比較にならない程の競争の激しい分野に発展しています。退職までに単行本を2冊出版でき、この分野の確立に微力ながら貢献できたと、自負しています。これは、ひとえに国際共同研究の賜物であると思っています。

教育面では、50:50の「相互恩恵」が国際交流の基本であるとの考えから、特に、アメリカ合衆国と台湾とは、共同教育の実践にも励みました。カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)とは「現代分子遺伝学」を4年間、国立台湾大学(NTU)とは「分子細胞生物学」を15年間、「国際連携遠隔講義」として提供(海底ケーブル等を用いた同時中継として放送)しました。両大学から数名ずつの教員が交互に講義・質疑応答を担当し、「学生は自国にいながら、外国の大学の講義を互いに同時に聴講できる」システムです。また、開講期間中、優秀な学生は相手大学に1週間程度、相互訪問し多くの友人を作ります。これらの講義を受講した医学部、理学部、農学部、総合人間学部等の学生たちの10数人は既に立派な研究者として活躍しています。長尾 真 元総長の時代に始まったこの国際連携遠隔講義は、学生教育もさることながら、若手教員の啓蒙・教育技術向上に大いに役立った、と確信しています。私は、視力・体力も衰えた現在でも国際教育への熱情だけは衰えておらず、Distinguished Chair Professor(招聘教授)として、NTUで大学院講義を毎年開講しています。

現在では、国際交流をサポートする色々な研究助成金があります。現役の研究者の方、大学院生の方には、これらの助成金を利用して大いに研究者交流・国際共同研究を発展させていただきたいと思います。

(たけやす くに お、平成28年退職、元大学院生命科学研究所教授、専門は分子情報解析学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

スウェーデンの
博士論文審査事情

小山 里奈



2019年2月から1年間、私は所属する情報学研究科が実施する若手教員長期海外渡航支援事業の支援を得て、スウェーデン北部のウメオ市に滞在しスウェーデン農業科学大学 (SLU) で研究する機会を得た。行き先をスウェーデンに決めた際、同僚の一人に言われたことは「男女機会均等の国に行ってきた感想を聞くのが楽しみ」。

実際のところ、滞在中に男女機会均等を意識させられた頻度は高くなかった。ただし、印象に残っているのは、博士論文審査委員会には男性と女性の両方の委員が含まれていなければならないというルールが存在する、ということだ。スウェーデンの大学の博士論文審査は、公聴会にOpponentと呼ばれる対抗的・否定的な面からの質疑を行う役割の審査員が審査委員会とは別に置かれる、完成した学位論文を公聴会前に皆が閲覧可能な専用の場所に釘で打ち付けるNailingという儀式があるなど、日本あるいは京都大学の学位論文審査とは様々な点で異なっている。それに加え、公聴会の冒頭で座長が審査対象者とOpponent、審査委員会メンバーを紹介した際、明示的に「この審査委員会は男女両性を含むという大学のルールに準じている」と説明があったのである。

私の所属する情報学研究科では、女性の教員・研究者が少ない状況が長い間続いている。2019年時点での女性教員数は100人程度いる常勤専任教員のうち、2名。これまでに一番多かった時期でも5名程度ではなかったか。幸か不幸か、京都大学にも情報学研究科にも学位審査委員に両性が含まれなければならないというルールは存在しない。もし存在すれば、現状の女性教員数では、現在のペースで学位審査を行うことは不可能だろう。

実際には、SLUでも教授など学位審査委員になれる人は男性のほうが多いので、結果的には女性教員の負担が大きくなるという問題があるとのことであった。分野や大学による差がどの程度かはわからないが、「機会均等の国」の大学でもまだ、完全に均等には至っていないということなのだろう。しかし、教員の男女比があまり偏ると学位審査に支障を来し得るこのルールの存在は、人事の際にも無視できないだろうと想像される。

4年前、男女共同参画推進センターニュースレター「たちばな」に、「私の研究内容にも教育内容にも、私の性別は関係ない。『女性として』の諸々を引き受けるのは、いつか、『女性』研究者と呼ばれない日が来るのに役立つ欲しいから」と書いた。男女平等先進国スウェーデンの大学でも、平等を目指してそのような「女性として」を引き受ける教員がまだ必要で、そのためにある意味で強制力のあるルールが設定されている。京都大学あるいは情報学研究科の現状では、同様のルールを設定することさえ現実的に難しい。「いつか『女性』研究者と呼ばれない日」はまだ遠い。

(こやま りな, 大学院情報学研究科准教授,
専門は森林生態学・植物生理生態学・生態系生態学)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

田村 類 名誉教授が N. M. Emanuel Medal を受賞

田村 類 名誉教授(元人間・環境学研究科教授)が、10月1日(木)にロシア科学アカデミー・モスクワ大学より「N. M. Emanuel Medal」を受賞しました。

N. M. Emanuel Medalは、ロシア科学アカデミー・モスクワ大学のN. M. Emanuel Institute of Biochemical Physicsを創設した著名な科学者Nikolay M. Emanuel (1915-1984)を顕彰して2007年に創立されたものです。毎年、物理化学と生化学の基礎研究分野で功績のあったロシア人研究者2名と外国人研究者2名にメダルが授与されてきましたが、日本人の受賞は今回が初めてとなります。

田村名誉教授の研究グループは、「複雑系化学現象の発見とそのメカニズムの解明」を研究テーマとしてきました。2004年から、身近な機能性物質である液晶を外部刺激に対して敏感に感応する複雑系の散逸構造と捉えて、外部磁場および電場応答性を示すメタルフリー磁性ソフトマテリアルの開発を目指してきました。その結果、それまで未開拓であった、分子中央部にキラルな環状ラジカル構造を有する安定なメタルフリー有機常磁性液晶物質を初めて合成し、電気極性と磁気極性を併せもつキラル液晶の創製に成功しました。また2006年にこれらの物質が液晶相で強誘電性を示すことを、2008年にはこれらが超常磁性(強磁性ドメインの形成)を示すことを初めて明らかにしました。2012年にこの超常磁性現象を「正の磁気液晶効果(positive magneto-LC effect)」と命名しました。さらに、2013年にこの強誘電性と超

常磁性を併せもつ物質が、液晶状態でしかも高温で「磁気電気効果(magneto-electric effect)」を示すことを初めて実証しました。次いで、構造の異なる有機ラジカル液晶物質を次々と合成して「正の磁気液晶効果」の一般性を証明し、この現象発現のメカニズムを提唱しました。最近では、これらの磁性液晶に見られた超常磁性の発現をミセル構造やエマルション構造へと拡張し、磁気共鳴画像(MRI)法により追跡可能な抗がん剤を内包させた安定なメタルフリー磁性ナノエマルション(混合ミセル)の開発に至りました。

このように、複雑系理論に基づく独創的なアイデアを具現化し、液晶科学とコロイド科学の新たな方向性を見出す先進的な研究を推進したことが高く評価され、今回の受賞につながりました。

(大学院人間・環境学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



栄誉

日本学士院会員に選出

12月14日(月)、本学出身の吉野 彰 旭化成株式会社名誉フェローおよび金出武雄 高等研究院招聘特別教授が日本学士院会員に選出されました。日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的としています。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

吉野 彰 旭化成株式会社名誉フェロー

吉野 彰 旭化成株式会社名誉フェローは、昭和45年京都大学工学部石油化学科を卒業され、昭和47年同大学院工学研究科修士課程石油化学専攻を修了後、ただちに旭化成工業株式会社(現旭化成株式会社)に入社し研究開発部へ配属されました。同氏は工学部・工学研究科在学時にはノーベル化学賞受賞者福井謙一先生の高弟である米澤貞次郎先生の研究室に一貫して所属し、福井門下の学風にふれながら実験的研究を遂行されました。

旭化成株式会社においてはイオン二次電池事業推進部商品開発グループ長、株式会社エイ・ティー・バッテリー技術開発担当部長、旭化成株式会社イオン二次電池事業グループ長、電池材料事業開発室室長等を歴任された後、旭化成グループフェロー、さらに旭化成株式会社顧問に就任しました。平成29年には旭化成株式会社名誉フェローに就任し現在に至ります。

この間、平成17年には大阪大学で博士(工学)の学位を取得、さらに令和2年5月には本学から京都大学名誉博士の称号を授与されました。また平成29年から名城大学大学院理工学研究科教授を務め、令和2年には同大学特別栄誉教授となりました。全米技術アカデミーのチャールズ・スターク・ドレイパー賞、日本国際賞など数多くの学術賞も受けています。平成16年には紫綬褒章、令和元年には文化勲章を受章、同年文化功労者の顕彰も受けました。さらに同年12月にはリチウムイオン電池の開発によりノーベル化学賞を受賞しました。

吉野氏による実用性の高いリチウムイオン二次電池の発明では、ノーベル化学賞を共同受賞した米国のグッドイナフ教授の発明による安全なコバルト酸リチウムを正極に、また耐久性の高い炭素系材料(特許出願ではカーボンと呼称)を負極に選定されています。これによって安定的な動作確保が可能なりチウムイオン二次電池の基本概念が昭和60年に達成されました。現在のモバイル機器電源やエコカー車載バッテリーの実現はすべてこの発明に基づいています。

今回の日本学士院会員への選出は、同氏の国際的な業績であるリチウムイオン二次電池の発明が高く評価されたものであり、大変喜ばしいことです。

【関連リンク】

- ・日本学士院会員の選定について(吉野彰)：

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2020/121401.html#007>

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



写真提供：旭化成株式会社

栄誉

金出武雄 高等研究院招聘特別教授

金出武雄 招聘特別教授は、京都大学大学院工学研究科博士課程を修了、工学博士の学位を授与され、京都大学工学部助手、同助教授、カーネギーメロン大学准教授、同教授を経て1998年よりカーネギーメロン大学ワイタカー冠全学教授、2017年より京都大学高等研究院 招聘特別教授となり、現在に至りません。

日本学士院会員選出に至った主な学術上の業績は、コンピュータビジョンと知能ロボット工学の先駆的研究を進め、その基礎理論と応用に多大な貢献を果たしたことです。特に、自動運転分野では1980年代半ばに自律陸上自動走行車の研究を始め、10年余の基礎研究の成果として1995年にアメリカ東部から西海岸まで約5,000kmの98%をコンピュータビジョンによって走破するという自動運転研究史上における画期的成果を挙げ、今日の自動運転の先駆けを作りました。また、コンピュータによる人の顔画像認識、ビデオ圧縮など動画像処理に使われる基本アルゴリズムLucas-Kanadeオプティカルフロー法理論、今日テレビ等で見られる「アイビジョン」に代表される多数カメラを用いた自由視点画像技術など、日常使われる多くの技術において顕著な業績を挙げました。(出典：日本学士院ホームページ)

なお、金出招聘特別教授の卓越した業績に対し、これまでにジョゼフ・F・エンゲルバーガー賞(1995年)、米国工学アカデミー外国特別会員(1997年)、C&C賞(2000年)、船井業績賞(2004年)、IEEE Computer Society アズリエル・ローゼンフェルド生涯業績賞(2007年)、IEEE ロボットとオートメーションパイオニア賞(2007年)、大川賞(2007年)、フランクリン協会 バウアー賞科学部門(2008年)、ACM-AAAI アレン・ニューウェル賞(2010年)、立石賞特別賞(2010年)、京都賞(2016年)、IEEE Founders Medal(2017年)、文化功労者(2019年)、Global IT Award アルメリア国家賞(2019年)など、多数の栄誉が授与されています。

【関連リンク】

- ・日本学士院会員の選定について(金出武雄)：

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2020/121401.html#006>

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)



話題

令和2年度医学部附属病院災害対策訓練を実施

医学部附属病院では、「京大病院事業継続計画(BCP)」の検証と防災意識の高揚を図るため、10月7日(水)に災害対策訓練を実施しました。

訓練は、土曜日の昼間(14時頃)に震度6弱程度の地震が発生、建物に一部損壊があるものの本院に大きな被害はないが、多数の傷病者来院が見込まれるという想定で行い、①休日における災害対策本部設置・運用訓練、②安否確認/当院可否報告メールの運用訓練、③BCPに基づく診療継続訓練を実施しました。

災害対策本部では、実際の状況を想定し、限られたスタッフで、災害対策本部の立ち上げ、各病棟から提出された発災時報告書やチェックリストの収集、院内外の被災情報の整理を行いました。また、災害対策本部長(宮本 享 医学部附属病院長)が出張先から京都に戻れないという想定の下、WEB会議システムを用いて災害対策本部会議を開催し、要解決事項・要請事項への対応を検討しました。

今回の訓練では、新型コロナウイルスの影響により訓練規模の縮小を余儀なくされたことから、新しい災害訓練の形を模索し、対策本部にWEBカメラを設置しました。

訓練の様子を中継放送することにより、実際の訓練参加者は少人数に絞りましたが、多数の教職員、医療スタッフが訓練を見学することができました。

医学部附属病院は、京都府災害拠点病院(平成27年4月1日指定)として、今後も継続的に災害対策訓練を実施することにより、災害対応力の強化を図っていきます。



WEBミーティングによる災害対策本部会議



各部署からの情報を確認する災害対策本部要員①



各部署からの情報を確認する災害対策本部要員②



各部署からの情報を確認する災害対策本部要員③

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、吉川和広 名誉教授、櫻井 彰 名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

吉川 和広 名誉教授

吉川和広先生は、11月14日逝去されました。享年90。

先生は、昭和29年京都大学工学部土木工学科を卒業、昭和31年同大学院工学研究科修士課程を修了し、昭和38年京都大学工学博士の学位を授与されました。昭和31年4月から運輸省第三港湾建設局勤務を経て、昭和36年4月京都大学工学部助教授に採用され、昭和42年10月に教授に就任、土木計画学講座を担当されました。平成6年停年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。本学退職後は、平成6年4月から平成13年3月まで関西大学工学部教授を務められました。

先生は土木計画学の発展に多大な貢献をされるとともに、交通計画、地域計画の分野における数多くのプロジェクトを指導されてきました。これらの研究成果は、663編の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。

また、学会活動では、土木学会において、関西支部副支部長、論文集編集委員会委員長等を歴任され、特に土木計画学研究委員会設立にあたり中心的な役割を果たし同委員長も務められました。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成23年11月瑞宝中綬章を受けられました。



(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)

櫻井 彰 名誉教授

櫻井彰先生は、10月16日に逝去されました。享年93。

先生は、昭和27年3月東北大学理学部を卒業後、同年4月同理学部助手に採用され、昭和33年5月京都大学工学研究所（のちに京都大学原子エネルギー研究所に改組）助手に転任、昭和36年8月同助教授を経て、昭和43年3月同教授に昇任し、原子炉構造研究部門を担当、平成2年3月31日に停年退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。

この間、先生は原子炉構造研究部門を統括し、教育研究面において人材の育成に努め成果をあげるとともに、昭和58年11月から2期4年間、京都大学原子エネルギー研究所長として研究所の管理運営に尽力し、同時に、京都大学評議員として大学の運営にも参画されました。

先生は、大規模原子エネルギー利用の黎明期より、原子炉、高速炉および将来の核融合炉



訃報

とその大型超伝導マグネットにおける熱エネルギー変換ならびに冷却機能に関する、水、高温液体ナトリウム、極低温液体ヘリウムおよび液体窒素等の液中における沸騰熱伝達を安定かつ安全に確保するために不可欠な最大利用限界条件，ならびにそれらの液体における膜沸騰現象に関する先駆的研究成果を多数公表し，原子力熱工学の発展に貢献されました。

平成2年には米国機械学会の熱伝達部門最優秀論文賞と共に，同学会36部門からの全ての最優秀論文賞受賞論文の中から”機械工学に関する最も独創的な研究論文”1編に対して与えられる最高論文賞であるメルビル・メダルが授与されました。平成17年には瑞宝中綬章を受章されました。

(エネルギー理工学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

京大広報
No.754

令和3年1月31日発行

発行 京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。
「京大広報」の既刊号は，次のURLでご覧いただけます。
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



京都大学は2022年に創立125周年を迎えます
URL : <https://125th.kyoto-u.ac.jp>